

それぞれのギフトを

〈海の学校〉主宰 / 土佐山アカデミー理事

内野 加奈子

1976年、〈ホクレア〉と呼ばれる一艘の伝統航海カヌーが、ハワイからタヒチを目指す約4千5百キロの旅に出航しました。太平洋の真ん中にぽつんと浮かぶハワイ諸島に、最初に人が降り立ったといわれる約1,300年前、人々は一体どのように、大海原の孤島に辿り着いたのでしょうか。それを実証するために、伝承をもとに再建された〈ホクレア〉は、海図やコンパスを使うことなく、星、月、太陽や波の動き、風の向きといった自然からのサインを読み解く伝統航海術を使って、ハワイ出航から31日後、水平線の彼方のタヒチを見事に見出し、航海を成功へと導きます。

一度きりの実験航海のはずだった〈ホクレア〉の航海は、ハワイやタヒチをはじめとするポリネシアの数多くの島々で、人々が伝統文化への深い誇りを取り戻すきっかけとなり、その後も数多くの航海を重ねることになります。初航海から間もなく40年目となる現在は、3年に渡る世界一周航海の真最中です。

そんな伝統航海の魅力に惹き付けられた私は、2000年にハワイに渡り、大学で海洋学を学ぶ傍ら、〈ホクレア〉の活動に参加するようになりました。星や波、空の読み方や、海でのカヌーの扱い方を学んだり、カヌーの修繕活動を手伝ったりする中、2004年、ハワイ北西諸島に向けての航海のクルーとして選ばれ、2007年には、ハワイから日本へ向けた、1万3千キロ、5ヶ月に及ぶ航海のクルーとなりました。

私は伝統航海術を学ぶ中、2人の師に恵まれました。ひとりにはミクロネシア、サタウル島のマウ・ピアイルグ、そしてもう一人はハワイのナイノア・トンプソンです。マウは、1976年、ホクレアのタヒチへの初航海を成功へと導いた伝統航海術師です。生まれてすぐに、伝統航海術の継承者として選ばれ、赤ん坊の頃から、航海術師としてのトレーニングを受けた存在です。ナイノアは、そんなマウの弟子として、航海術を学び、ハワイで数百年の間、失われてしまっていた伝統航海術を、現代へと蘇らせました。

数多くの偉業を成し遂げた2人に、私ははじめ、どこか超人的なイメージを抱いていました。けれども、彼らの側で学んだり、航海を共にしたりする中で、少しずつ、彼らの人間的な側面が見えてきます。超人だ



●プロフィール：ハワイ大学院にて海洋学を学び、日米の教育機関と提携しながら、自然をベースにした学びの場づくりに携わる。伝統航海カヌー〈ホクレア〉の日本人初クルーとして、歴史的航海となったハワイ―日本航海をはじめ、数多くの航海に参加。土佐山アカデミー理事。〈海の学校〉主宰。著書に『ホクレア星が教えてくれる道』（小学館）

と思っていた彼らも、不安がったり、悲しんだり、怒ったりします。間違えたり、失敗したりします。体調を壊して寝込んだりします。彼らは決して、強靱な体力と精神力ですべてをこなす超人ではなく、普通の人間のように揺れる心と揺れる身体を持ち合わせ、失敗を繰り返しながら生きているのです。

私ははじめ、そんな彼らの姿を見ることで、理想の偉人像が壊れてしまうのではないかと考えていました。けれど、彼らを知れば知るほど、以前よりもずっと尊敬の念を持って、見るようになっていきました。

彼らは自分の弱さもしっかりと受け止め、受け入れながら、それを隠すことなく、その分、自分の持っている力を存分に発揮するために、最大限の努力を続ける存在でした。マウは、老衰した不自由な体に無理をかけながら、自ら手を動かしてカヌーを作り続けたり、遠くの島まで航海術を教えに出たりしていました。ナイノアはどんなに忙しくても、必ず海に出る時間を取り、夜遅くまで仕事があっても、暗闇の中、小さなアウトリガーカヌーで海に漕ぎ出していました。

マウは太平洋の海洋文化の歴史を大きく塗り替えた存在であり、ナイノアは、現在も航海術師として活躍する傍ら、ポリネシア航海協会の会長やハワイの先住民文化を支えるカメハメハスクールの理事を務めるなど、ハワイではLiving Legendとして尊敬を集めています。一見、普通では成し遂げられないような偉業をこなした彼らも、決して“特別な人”ではありません。彼らはただ、自らが心惹かれるものに、ひたむきに力を注ぎ、そしてそれを心から楽しみながら続けていました。それは、自分に与えられたギフトに責任を持つ姿勢、といてもいいのかもしれない。それぞれがそれぞれのギフトを磨き、それを差し出し合うような社会。そこには限りない豊かさがあるような気がしてなりません。